WHOの新しい分娩ガイドラインを知る

ひとりひとりが大切にされ、出産のSDGsが実現されるために

Introduction

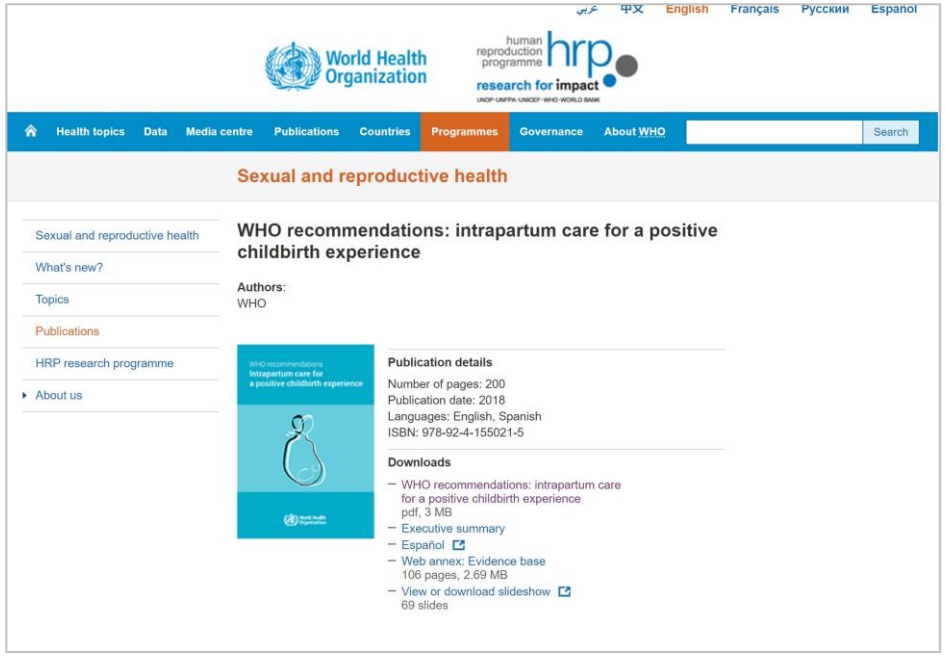
2021年6月27日　Special Vision#4

河合 蘭

WHO recommendations:intrapartum care for a positive childbirth experience(2018)

ポジティブな出産体験のための分娩期ケア

訳・飯村ブレット　古宇田千恵　笹川恵美　新福洋子
杉本敬子　高橋優子　ドーリング景子　春山怜　日隈ふみ子
福澤利江子　(2021年　医学書院)



約20年ぶりの改訂

冒頭「要約」より

国連採択された**「持続可能な開発目標3: あらゆる年齢のすべての人に健康的な生活を確保し、ウェルビーイングを推進する」**及び新「女性、子供、青少年の健康のための国際戦略(2016～2030年)」に従い、国際指針は従来よりも焦点を拡大しています。つまり、出産時に異常が起きた場合に母子が命を落とさないようにするだけでなく、母子が強く成長し健康に生きるための潜在能力を最大限に引き出すことも目指すようになってきました。

In line with the targets of Sustainable Development Goal 3 – ensure healthy lives and promote well-being for all at all ages – and the new Global Strategy for Women’s,Children’s and Adolescents’ Health (2016–2030),The focus of the global agenda has also gradually expanded beyond the survival of women and their babies, to also ensuring that they thrive and achieve their full potential for health and well-being.

福澤利江子氏

森　臨太郎　氏

永井真理氏

助産雑誌2021年6月号(医学書院)
永井真理先生との出会いを頂く。

Interview

いのちを
つなぐ
ひとたち
vol.30

国立国際医療研究センター国際医療協力局　専門職／
前 WHO 西太平洋地域事務局 リプロダクティブ・
妊産婦・新生児・小児・思春期保健課　技官

永井真理さん

WHO の正常出産ガイドラインで女性が尊重されるケアを

2018 年，WHO（世界保健機関）は，22 年ぶりに正常出産のガイドラインを改め，このほど医学書院よりその日本語版『WHO 推奨　ポジティブな出産体験のための分娩期ケア』が刊行された。永井さんは前 WHO 職員としてその監訳を担った。このガイドラインはリプロダクティブ・ヘルス／ライツの実現に通じるものだという永井さんに，豊かな国際的医療協力のご経験や WHO ガイドラインの詳細をお聞きした。

インタビュー・構成・撮影：河合蘭

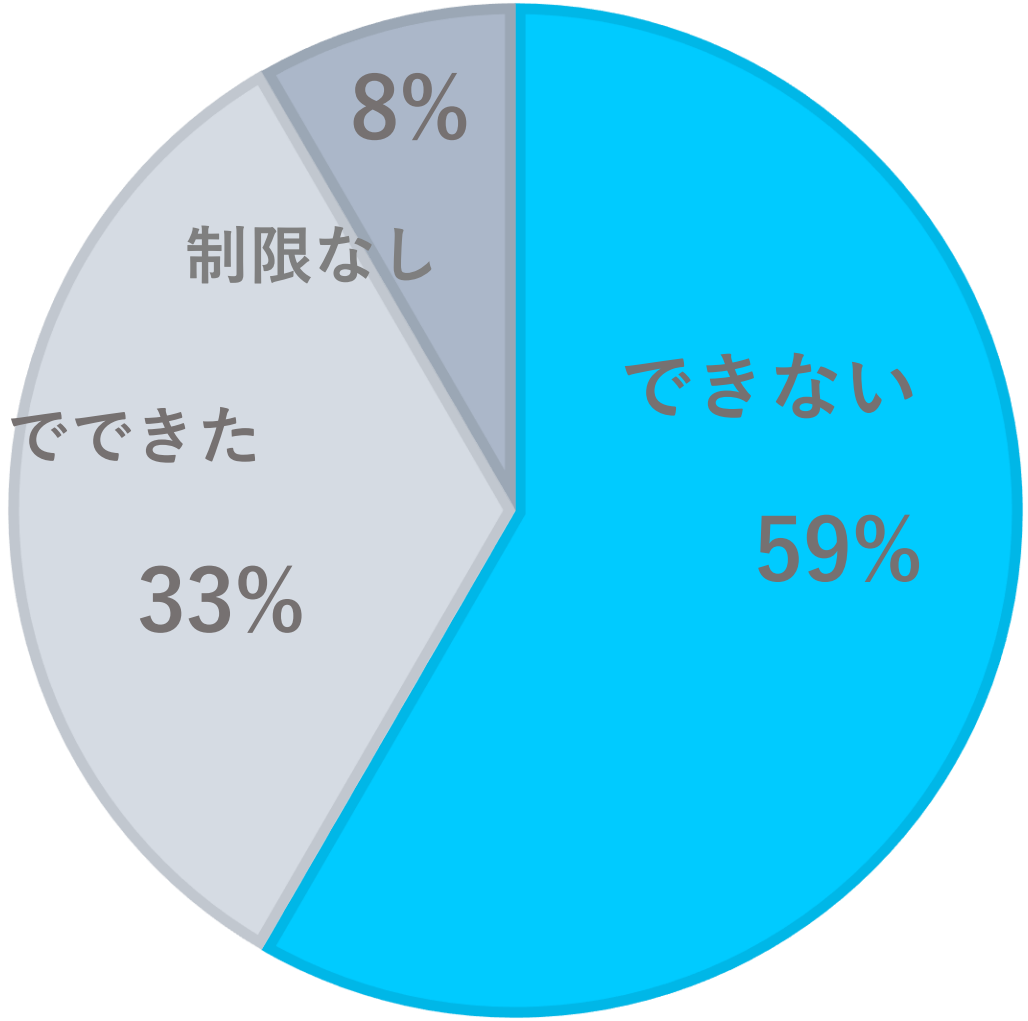
ながい・まり　東北大学医学部医学科卒業後，総合内科専門医を取得。1999 年より国境なき医師団などからスリランカ，イラン，アフガニスタンへ赴任。2003 年より米国留学，公衆衛生学修士を取得。2006 年から国立国際医療研究センター国際医療協力局に所属し，カンボジア，セネガルなどに長期赴任して保健省を支援。厚生労働省国際課にも勤務。2015〜2018 年に WHO 西太平洋地域事務局に赴任し，リプロダクティブ・ヘルスと母・新生児保健に関する各種 WHO ガイドライン作成に携わった。

旅への思いから国境なき医師団の活動へ

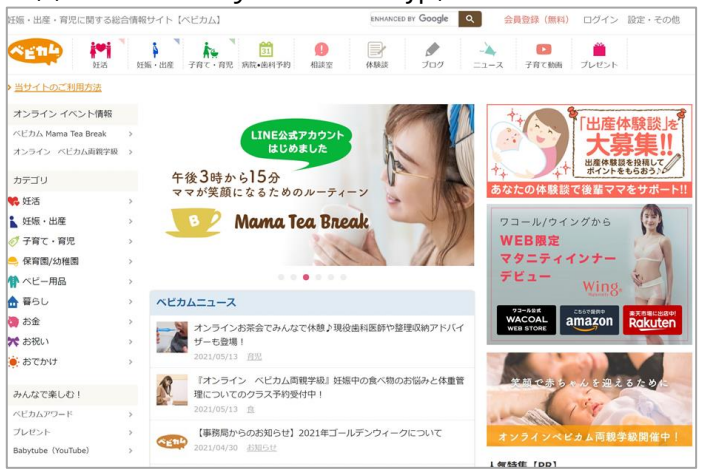
がありません。そんな時，国境なき医師団を知って，病院を辞めました。子どもの頃から引っ越し

立会い出産はできましたか(できますか)？

2021年に出産した人、する人　132人が回答　　妊娠・出産・育児サイト「ベビカム」



https://www.babycome.ne.jp/



1985年　WHO 出産技術についての勧告(WHOヨーロッパ/アメリカ地域事務局等)

英国から帰国したバース・エデュケーターの戸田律子さん、助産師のターナー節子さんが「WHOの1985年勧告は英国では大きな話題でランセット誌にも載っているのに日本では誰も知らない」と指摘。
→全文をコペンハーゲンから取り寄せ、1994年にREBORN第3号で紹介、のちに全22項目を翻訳しウェブサイトに掲載。

優しいお産をめざす情報紙　1994年4月号　VOL. 3

REBORN

日本にも優しいお産の波を・・・

適切な産科技術に関するWHOの勧告

●社会全体が出産ケアの様々な処置について知らされ、女性ひとりひとりが自分の望むタイプの出産を選択できるべきである。
●病院は、出産業務についての情報（帝王切開率など）を、一般に提供しなければならない。
●テクノロジーの査定には、これを使用する側の疫病学者、社会科学者、医療当局と、使用される側の女性たちも関わるべきである。
●女性の相互援助グループは、価値ある社会的支援と、出産情報を分かち合う独自な場を提供する。
●出産中及び産後に、家族のひとりと自由に会えることで、産婦の安寧が確保されるべきである。
●陣痛の誘発は、特定の医学的適応が認められる場合にのみ、おこなわれるべきである。いかなる地域においても、誘発率は10パーセントを越えるべきではない。
●剃毛あるいは浣腸は必要がない。
●陣痛中及び出産の際は、女性に載石位の姿勢をとらせてはいけない。彼女たちは陣痛中は歩き回ることを勧められるべきである。また、分娩時の体位は、女性ひとりひとりが自由に決めるべきである。
●膣伸展的な会陰切開は正当ではない。
●子宮下部横切開による帝王切開の経験者に対し、常に再度の帝王切開を求めることには確証がない。緊急手術が可能な場所では、帝王切開経験者の経腟出産は普通に奨励されるべきである。
●母乳哺育の遅延開始は、母親が分娩室を出る前であっても、奨励されるべきである。
●母子双方の条件が整う時は常に、健康な新生児は、母親のもとにとどまらなければならない。健康な新生児の観察は、そのいかなるプロセスも、母親と新生児の分離を正当化しない。

上記は、1985年、WHOアメリカ地域事務局、Pan American Health Organization、WHOヨーロッパ地域事務局共催「産科テクノロジーを考える会議」にて決議された勧告の一部である。その実現に向けた努力は、今も、ウルグアイに設置されたセンターを中心に続いており、90年には国際的調査をまとめた本も出された。西太平洋地域に属している日本には、この勧告を伝える公的ルートはまったく無かった。しかしその内容は、どう見ても、日本の出産と無関係ではない。日本でもたくさんの人に知ってほしい勧告だ。

（資料提供）戸田律子、ターナー節子　（協力）マヤ・シャーピ　（RO）洋合　樂（勧告の全容を知りたい方は、最寄り図書館に切手を送り編集部まで送ってください。）

http://www.web-reborn.com/

http://www.web-reborn.com/humanbirthpark/recommendations/WHO1985.htm

1985年　WHO(世界保健機構)　出産科学技術についての勧告

WHO Repont ICP/MCH 102/m02 (S) 1301K 10 June l085
Joint International Conference on Appropriate Techno1ogy for Birth
Fortaleza, Brazil, 22-26 Apri1 1985

出産のための適切な科学技術についての地域間共同会議
１９８５年４月２２～２６日　於・ブラジル、フォルタレザ

要約レポート

医師には挑戦的と受け取られる傾向があり、抗議も起きた。

しかし今見ると、ここにはWHO勧告のコアな要素がすでに整っている。

　WHOのヨーロッパ地域事務局およびアメリカ地域事務局は，南北アメリカとヨーロッパから，助産婦，産科医，小児科医，保健行政に関わる政府関係者，社会学者，心理学者，経済学者，サービスの受け手からなる60余名の参加者を迎え，合同会議を開催しました．そして，以下の原則に基づく多数の勧告が採決されました．

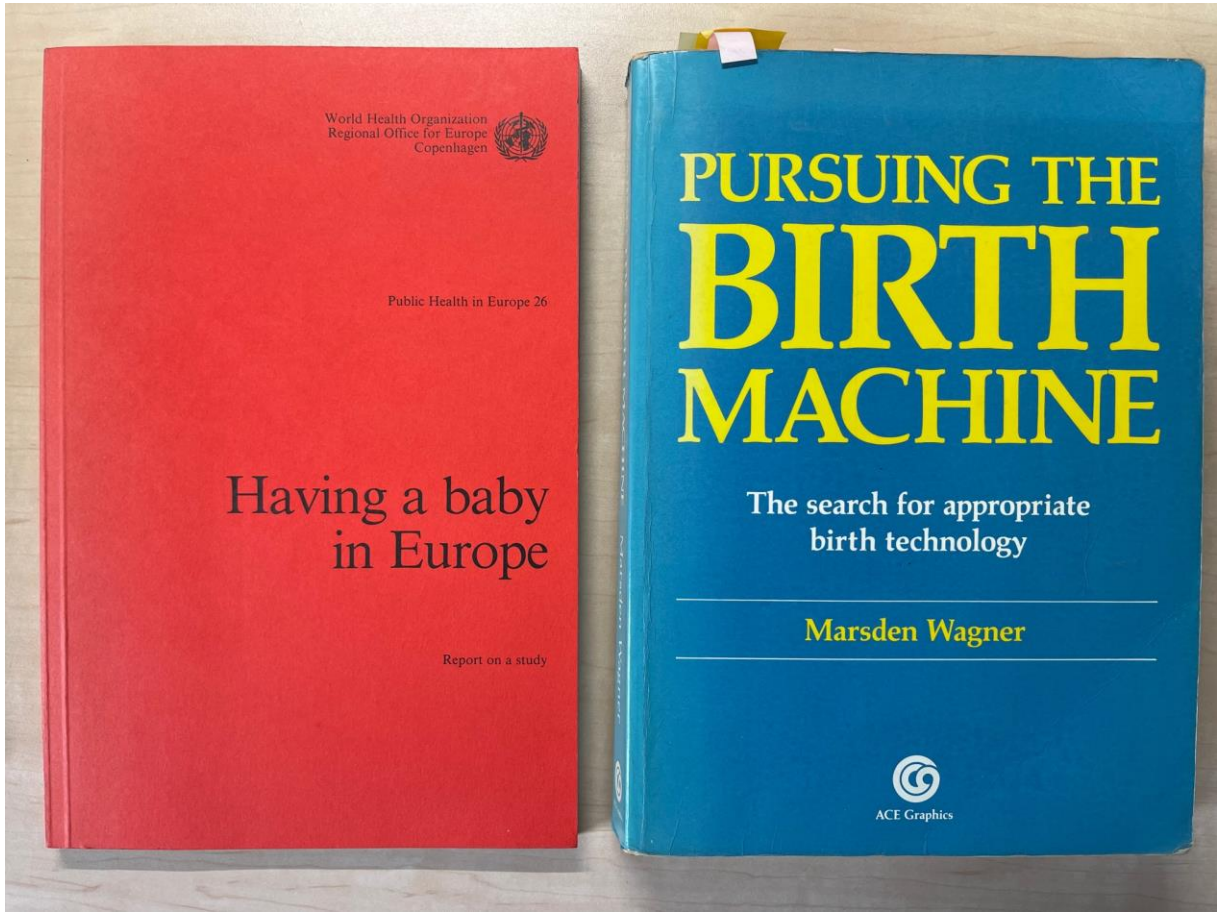
●すべての妊婦は，適切なケアを受ける基本的な権利を持ちます．

●あらゆる面においてケアの中心的役割を演じるのは女性です．女性はケアの計画，実行，評価にも参加します．

●適切なケアとは何かを理解し，それを実施するうえで，社会的，心情的，心理学的要素はとても大切です．

――1985年勧告全文と共に私が受け取った小包――

勧告産み育ての親、マースデン・ワグナー氏。困難はあったが草の根の活動家たちとつながり、マスコミや行政にも理解されて一定の成果をおさめた。著書には元FIGO会長バルシア博士が言葉を寄せている。

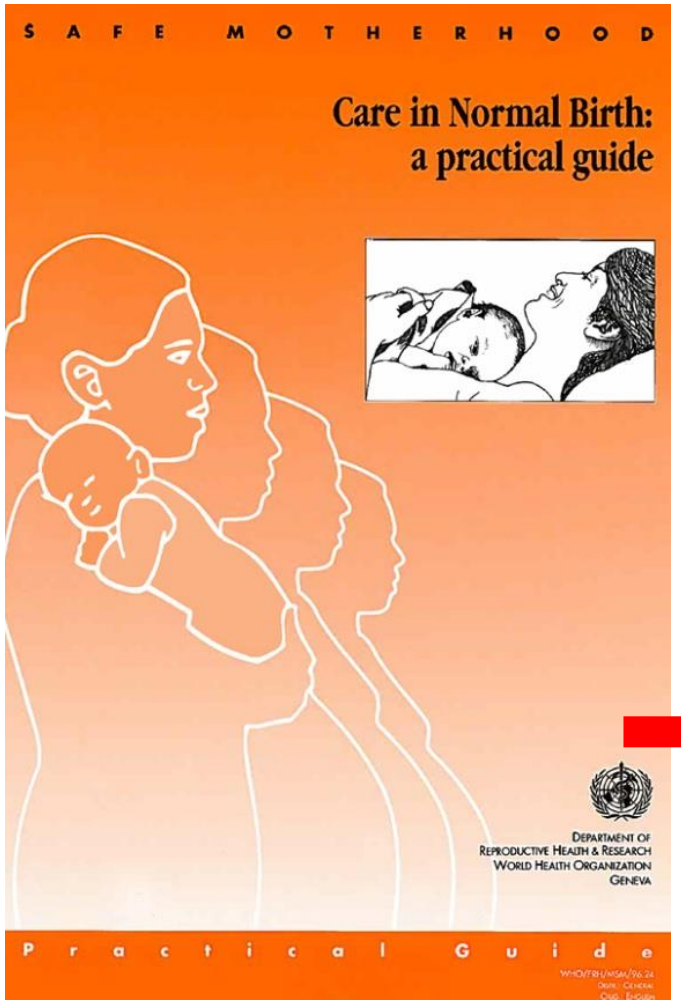


マースデン・ワグナー氏
1995年に来日

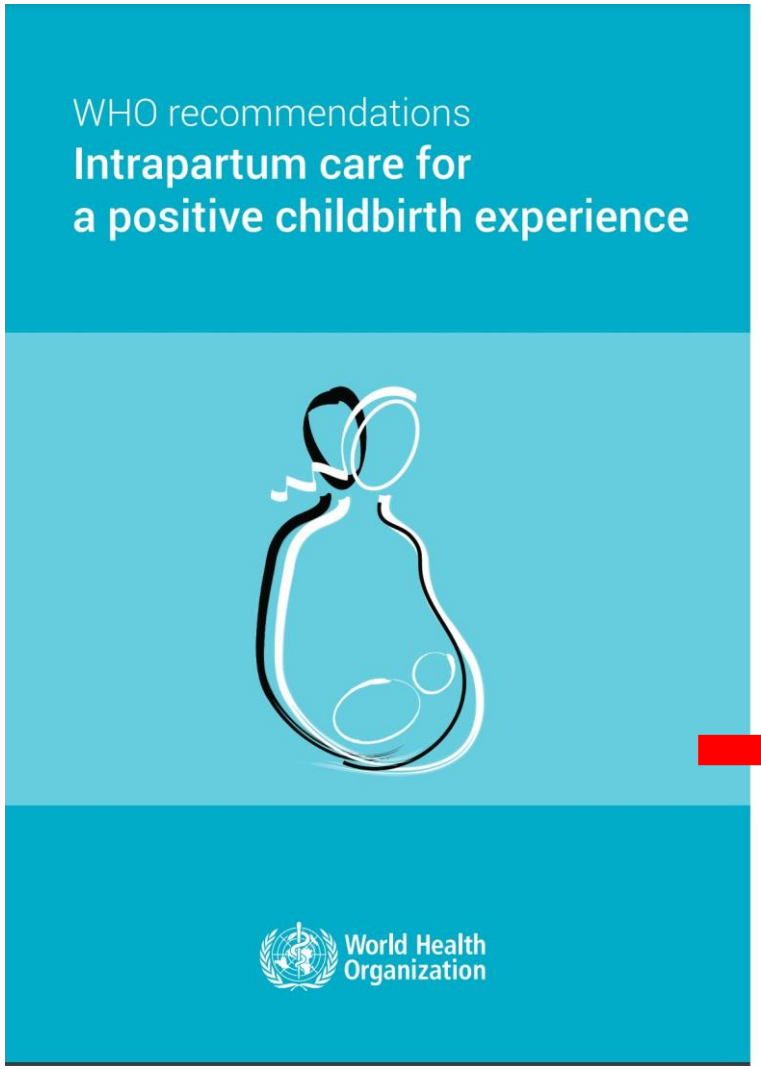
翻訳版2002年
（メディカ出版）

Care in Normal Birth : a practical guide　1996年

<u>WHOの59カ条　お産のケア実践ガイド</u>
戸田律子訳　(農文協)



そして22年ぶりに私たちは新しいガイドラインを迎えた



22年間の間に、世界で起きてきたこと

- 出産の安全性さらに向上
- 医療技術のさらなる進歩
- 質的研究の深まり
- メンタルヘルス
- インターネットの普及
- 不寛容 ⇔ 多様性
- 気候の変動、災害の増加
- 女性の社会進出、男性の家庭進出
- 新型コロナウィルス

福澤利江子氏(筑波大学医学医療系　助教)

- 助産師、国際ラクテーションコンサルタント。 岐阜県出身。

  1998年に広島大学卒業

- 1998-2000年　羽島市民病院産婦人科病棟

- 2000-2003年　長野県看護大学母性看護学講座　助手

- 今回のWHOガイドラインの日本語訳に携わる。

妊娠・出産は、それ自体は人によるコントロールが不能な領域であっても、**妊産婦さんは皆、納得のいく良い出産体験をしたい、心をこめたケアを受けたいというニーズがあることについて「ドゥーラ」が鍵になる**と思い2003-2009年にイリノイ大学シカゴ校に留学。

日本で1970年代に初めてドゥーラという言葉を紹介した故小林登先生（小児科医）に出会い、**2005年よりチャイルド・リサーチ・ネット「ドゥーラ研究室」にてドゥーラの情報を日本語で紹介。**帰国後は昭和大学横浜市北部病院、東京大学助教を経て、2015年より現職。

「A Doula Story」「DOULA!」「出産の自由を求めて」「マイクロバース」「おっぱいバンザイ」などの映画の日本語字幕、国際出産イニシアティブによる「安全で母子&家族を尊重したケアを実現するための12のステップ 」の翻訳者。

趣味は眠ること。家族は夫と4歳と7歳の娘。